

ふるがいと もとむ

【 미래賞 】 古垣内 求

『美和ちゃん』忘れていればゴメンネ。

もう60余年も前の話だから。

あなたと僕は、同じ病院に入院していた。

僕が小学4年で、君は確か2年生だった。

長い髪を束ね、面長で色が白く、いつも恥ずかしそうな顔をしながら、僕の居る病室にそっと入って来ました。

話好きで、いつも君のお母さんや、看護師さんから叱られていましたね。

弟が2人の僕は、女的美和ちゃんが珍しくて、いつまでもお話していたかった。

覚えていますか。夕方の散歩の時間になると、建物の隅にあるベンチで話し込み、よく叱られたのを。

2人が同じ病気で、長く入院していると、君のことを実の妹と錯覚することもありました。

あの日は、入院して6ヶ月ほど経った夜でした。消灯時間が過ぎると、あなたは僕のベッドのそばに立っていました。

「もう要らなくなったから。」と、リンゴと卵の入った籠を置いていきました。

「どうしたの？」と、訊いても返事をせずに、あなたは部屋から走り去りました。

朝になると、君が居なくなっていたのです。母に尋ねても、看護師さんに訊いても、教えてくれません。

僕は1年後に退院しました。

病気が全快し、成人した僕は結婚して、2人の娘の父となりました。

家庭を持っても、60余年過ぎても、あなたには別の感情があります。

残された人生もあとわずか。それまでに、どうしても君に逢いたい。

逢って『お兄ちゃん』と、呼ばれていたころの話をしたい。

お兄ちゃんも今は82歳のおじいちゃんです。あなたを思い出すと、今でも少年のような情熱が湧いてくるのです。

おばあちゃんとなった美和ちゃんです。逢いたい。

もう一度逢って話がしたい。

(大阪府 / 82歳 / 男性 / 無職)

社会福祉法人愛の友協会